View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

特別支援教育実践センター研究紀要　第15号，63-69，2017

＜原　著＞

知的障害者の家族の語りが大学生の意識変容にもたらしたもの

―― 教育学部生を対象とした授業のアンケート分析から ――

本渡　　葵*・河口　麻希*・若松　昭彦*・林田　真志*
牟田口辰己*・川合　紀宗*・竹林地　毅*

本稿では，本学教育学部１年次生を対象とした教養ゼミ（講義型）において，障害のある子どもの保護者による当事者参加型授業を実施し，その効果について検討した。障害（者）に対する理解を測る質問紙を用いた分析の結果では，［保護者の思い］を聞くことで，障害（者）理解への新たな視点を得られたことが明らかになった。受講学生に対して「今あるいはこれから自分にできると思う取り組み」について質問し，質的分析を行った。結果から，［障害者とのかかわり方］［障害（者）についての認識］［持続的探求］が抽出された。障害のある子どもの保護者による教育学部１年次生への授業は，将来，教育に携わろうとする学生にとっては，障害（者）の理解に加え，自分が今後取り組むべきことがより教育と結びついた形で明確になったと推察された。

キーワード：インクルーシブ教育，大学教育，教養ゼミ，当事者参加型授業，障害理解

Ⅰ．はじめに

広島大学では平成25年度に文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（以下，大学 COC 事業)」に採択され，「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」の事業を実施している。本事業では，「ひろしまの平和発信」，「条件不利地域対策（中山間地域・島しょ部対策に改称)」，「障がい者支援」の３つの領域にわたり，大学が「地域」に根ざした教育を提供し，「地域」の課題を共に考え，解決を目指す人材育成をねらいとしている。

本稿は，大学 COC 事業の「障がい者支援領域」における，教育学部に在籍する学部１年次生を対象とした教養ゼミ（講義型）の実施報告である。平成26年度より，「障がい者支援領域」における教養ゼミは，講義やワークショップを中心とした「講義型」と，障害シミュレーションを中心とした「体験型」の２つの形式で展開している。

「講義型」教養ゼミは，平成26年度実施分より，当事者参加型授業（柴田，2010）を継続しておこなっている。本領域において，当事者参加型授業を継続する背景には，受講する学生が当事者から学ぶ姿勢を身につけることへの期待がある（五十嵐・村上・小野塚・西村・竹林地・谷本・若松，2015)。大学 COC 事業が育成をねらう地域課題の解決に主体的に取り組める人材は，このような姿勢が必須であるといえよう。また，「教育学部学生を対象とした障害のある方やその家族あるいは関係者による『当事者参加型授業』の実施内容および効果」については，研究の積み重ねが必要とされている（五十嵐ら，2015)。

本稿では，平成28年度実施分教養ゼミ（講義型）の分析と考察を行う。平成28年度教養ゼミ（講義型）は，「知的障害児（者）の感じているコミュニケーション上の課題を知り，理解を深める」ことを目指し，知的障害のある子どもの保護者による講演やワークショップを中心とした当事者参加型授業を実施した。当事者参加型授業が，学生の障害の理解や認識に及ぼす影響を明らかにするために，学生への授業アンケートをもとに検討をおこなった。

Ⅱ．方　法

１．調査対象

調査対象は，2016年６月に実施した広島大学「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（COC）平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ」に係わる教養ゼミのうち，「知的障害児（者）の感じているコミュニケーション上の課題」をテーマにした講義を受講し

* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座

た学生に対して，授業アンケートを実施した。回答者数は192名であった。

2．授業アンケートの内容および手続き

授業アンケートは次の①～⑥で構成した。①学生の属性など個人に関する情報を問う項目，②受講後の「障がい」についての理解の深まりおよび具体的に深まったことはどのようなことかを問う項目，③受講して一番印象に残ったところは何かを問う項目，④今あるいはこれから自分にできると思う取り組みを問う項目，⑤大学 COC 事業の「障がい者支援」に関する領域で今回の授業以外に学んでみたい内容は何かを問う項目，⑥授業の感想を問う項目を設けた。

①および②の受講後の理解の深まりを問う項目以外は自由記述による回答を求めた。②の理解の深まりを問う部分は，「「障がい」について，あなたの「理解」は，授業を受ける前と比べて，どの程度深まったと思うか」とし，５件法による評価を求めた。５件は「非常に深まった」（５点）から「全く深まらなかった」（１点）とした。また，五十嵐ら（2015）が用いた発達障害児に対するイメージ調査の項目12項目を援用した（Table 1）。

なお，授業アンケートは，授業用配布資料とともに授業前に配布した。受講者は授業終了後，各自の座席でアンケートに回答した。また，授業運営の都合上，アンケート用紙の回収については授業をおこなった会場を退室する際にアンケート回収箱に各自投入する方法と，コースの担当教員が回収，封をし，その後大学 COC 事業担当者へ渡す方法の２つの方法を用いた。

Table 1　障がいに対する受講後の考えを問う項目

1	障がいのある人が地域社会で生活することによって，地域社会によい影響がある
2	障がいのある人が積極的に社会参加をしたほうがよい
3	障がいのある人のためのボランティア活動に参加したい
4	障がいに関するテレビやラジオの放送を，見たり聞いたりしたい
5	障がいのある人も一般的な社会生活を送ることができる
6	障がいのある人がクラスにいることは，周囲にもよい影響がある
7	障がいのある人がいろいろな作業をすることができる
8	仕事の中には，障がいのある人が入ってできる内容がたくさんある
9	障がいのある人と接したい
10	障がいのある人も，十分に指導すれば効果が上がる
11	障がいのある人が困っていれば助けたい
12	障がいに関する新聞記事を読みたい

3．分析方法

本稿では，当事者参加型授業による学生の障害に対する理解や認識への影響を把握するため，授業アンケートの項目の中でも②受講後の「障がい」についての理解の深まりを問う項目と，④今あるいはこれから自分にできると思う取り組みについて焦点をあてて分析を行った。

②受講後の「障がい」についての理解の深まりを問う項目のうち，「とくにどのようなことを理解したか」と，④今あるいはこれから自分にできると思う取り組みについては，データを概念に圧縮するオープン・コーディングをおこなった。さらに，④今あるいはこれから自分ができる思う取り組みについては，オープン・コーディングに加え，概念間の関連からカテゴリーを生成する選択コーディングおこなった。オープン・コーディングでは，記述データの意味を解釈し，一つの概念につき一枚のワークシートを用いて，概念の名称および定義と具体例を記入した（Table 2）。これらの作業を繰り返し行い，概念の修正を試みた。修正が必要なくなった時点で概念を決定した。また，選択的コーディングでは，生成された概念間の関係性を解釈しカテゴリーを生成した。さらにカテゴリー間の関係性の検討をもとにカテゴリーの上位に位置するカテゴリーグループを生成した。

Table 2　分析ワークシート（例）

概念	保護者の思い
定義	障害を持つ子どもの保護者の思いを理解する。
具体例	・障がいを持つ子どものお母さん方から話を聞いたことで，本当に周りの人がするべきことが分かった。 ・親御さんのリアルな声を聞くことで，何をすれば良いかなど具体的な方策が分かった。 ・親目線での話を聞くことができて，多面的な理解ができるようになった。

Ⅲ．結　果

1．理解の深まりについて

質問項目②受講後の「障がい」についての理解の深まりに関し，調査対象192名のうち約96％にあたる185名が「障がい」について理解が深まったと回答した。

Fig. 1は，質問項目②の「障がい」に対する受講後の考えを問う項目の平均値と標準偏差である。項目別の平均値を比較した結果，平均値4.5を超えるものは，項目２「障がいのある人も積極的に社会参加をしたほうがよい」，項目７「障がいのある人もいろいろな作

業をすることができる」，項目８「仕事の中には，障がいのある人が入ってできる内容がたくさんある」，項目10「障がいのある人も，十分に指導すれば効果が上がる」の４項目であった（Fig. 1，Table 3）。標準偏差0.85を超えるものは，項目３「障がいのある人のためのボランティアに参加したい」，項目５「障がいのある人も一般的な社会生活を送ることができる」，項目９「障がいのある人と接したい」の３項目であった。

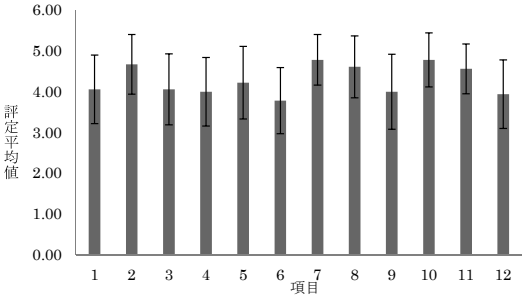

Fig. 1 「障がい」に対する受講後の考えを問う項目の平均値と標準偏差

Table 3 「障がい」に対する受講後の考えを問う項目内容と項目の平均値および標準偏差

		M	(*SD*)
1	障がいのある人が地域社会で生活することによって，地域社会によい影響がある	4.06	(0.84)
2	障がいのある人も積極的に社会参加をしたほうがよい	4.67	(0.73)
3	障がいのある人のためのボランティア活動に参加したい	4.06	(0.87)
4	障がいに関するテレビやラジオの放送を，見たり聞いたりしたい	4.00	(0.84)
5	障がいのある人も一般的な社会生活を送ることができる	4.22	(0.89)
6	障がいのある人がクラスにいることは，周囲にもよい影響がある	3.78	(0.81)
7	障がいのある人もいろいろな作業をすることができる	4.78	(0.62)
8	仕事の中には，障がいのある人が入ってできる内容がたくさんある	4.61	(0.76)
9	障がいのある人と接したい	4.00	(0.92)
10	障がいのある人も，十分に指導すれば効果が上がる	4.78	(0.66)
11	障がいのある人が困っていれば助けたい	4.56	(0.61)
12	障がいに関する新聞記事を読みたい	3.94	(0.84)

次に，理解について「とくにどのようなことを理解したか」を問い，自由記述による回答を求めた。データを分析した結果，Table 4に示すように10の概念が生成された。障害のある子どもの保護者による講演，ワークショップを通し，保護者の日頃の思いや子どもの育ちを見守る様子［保護者の思い］から，障害（者）について理解し［障害理解］，新たな視点を得ることができたと感じていた［当事者理解］。これまで，学校などで障害について学ぶ機会があったが，本実践の柱であった体験活動をともなうワークショップを通して，障害をもつ人が抱える困難を擬似的ではあるものの感じ取ることができた者もいた［体験を通した障害理解］。これらの障害理解をふまえ，保護者による経験談や，支援の際のポイントをふまえ，自分もできることをしようと考える者もいた［具体的な支援方法］。また，保護者の講演から，過度な支援が障害のある人の成長を妨げる場合があると聞き，支援する側の姿勢そのものを問い直す者もいた［支援のあり方］。

支援については，障害に目を向けるにとどめず，障害を超えてその人の個性を大事にすることが欠かせないと考える者もいた［個性の重視］。

また，障害（者）が直面している社会生活や制度上の課題を理解し，これらの課題を，解決に向けて取り組むべき身近な問題として受けとめていた［障害（者）をとりまく現状や課題］。さらに，障害の概念そのものをどう捉えるかが重要であると感じている者もいた［障害の捉え方］。

受講者は教育学部の１年次生であることから，教育が障害（者）や，社会に対してどのようにアプローチできるのかを考える者もいた［教育からのアプローチ］。

Table 4 生成した概念一覧（理解）

概念	定義／代表的な記述
当事者理解	障害を持つ当事者について理解する。
	障害を持つ人が少しずつでも成長することや，同じように悲しむが表現することが難しいのだということ。
保護者の思い	障害を持つ子どもの保護者の思いを理解する。
	障がいを持つ子どものお母さん方から話を聞いたことで，本当に周りの人がするべきことが分かった。
具体的な支援方法	具体的にどうような支援方法があるのかを理解する。
	話しかけるときは，サポートの人がいても，本人に話しかけるようにする。

障害（者）をとりまく現状や課題	障害（者）をとりまく社会の現状や課題を理解する。
	障害に対しての問題が色々混在していることを知って，自分たちも配慮していかなければならないということ。
障害理解	障害について理解する。
	知的障害といっても，様々である。
教育からのアプローチ	教育から障害（者）について考えることの意義を理解する。
	教員の存在の大切さも学ぶことができた。
個性の重視	障害にのみとらわれず，その人の個性を重視することを理解する。
	「障がいを持つ人」も個性を持っているところ。
障害の捉え方	障害をどのように捉えるかが，障害（者）に与える影響を理解する。
	自分が「障害」をどう捉えるかで，その人の生きやすさが変わってくるんだということを，切実に感じた。
体験を通した障害理解	体験を通して障害について理解する。
	体験を通して，相手に言いたいことが伝わらないもどかしさを感じた。
支援のあり方	当事者の思いや願いを汲んだ支援が必要であることを理解する。
	いつも助けを必要としているわけではなく，必要に応じて支援するべきであること。

2．今あるいはこれから自分にできると思う取り組みについて

（1）概念生成

データを分析した結果，Table 5に示すように，10の概念が生成された。

授業において，障害のある子どもやおとなの日常生活について，保護者の語りを聞き，障害のある人への適切なかかわりの姿勢を考える者もいた［よりそう姿勢］。かかわりに関しては，状況をよく見て，本人が困っていれば支援すると考える者［困っている際の支援］，障害のある人が身近にいれば自ら積極的に声をかけ，自分にできることをしたいと考える者にわかれた［積極的なかかわり］。また，日頃，障害をもつ人とかかわる機会がないと感じている学生は，ボランティア活動に参加することで，まずはかかわる機会をもちたいと考えていた［ボランティアへの参加］。

また，かかわり方を考えるにあたり，障害や障害のある人に関する知識そのものが不足しているため，知識を習得したいと考える者もいた［障害（者）についての知識の習得］。

一方で，障害や障害のある人に対して，これまでの自分の考えがいかに偏っていたのかを内省し，意識を改めることが，よりよいかかわりにつながると考える者もいた［障害（者）についての意識改善］。これに関わり，障害そのものを深く理解するだけでなく，その人個人の個性を尊重してきたいと考える者もいた［個性の尊重］。

さらに，今はまだ何ができるか明確ではないが，授業で学んだことをもとに，これから自分にできることを考えていきたいという者もいた［できることは何かの探求］。加えて，教師を志す学生は，将来，教師という立場にたった際，授業や社会貢献活動などを通して取り組みたいことを挙げたり，教師として障害のある生徒に対するかかわり方を考え続けたいという者もいた［教師としてできることの探求と実践］。

Table 5　生成した概念一覧

よりそう姿勢	障害のある人の願いや思いを大切にする。
	障害のある人を見かけたら，何でも手を貸すのではなく，見守るということ。
困っている際の支援	見守る姿勢でかかわり，困っている状況であった場合は支援する。
	何でも手伝うのではなく，困っているかどうかを判断して声かけする。
かかわり方の工夫	これまでのかかわり方を工夫する。
	分かりやすく伝える。
積極的なかかわり	障害者に声をかけるなど積極的にこちらからかかわる。
	積極的に障害者に手を差しのべる。
ボランティアへの参加	ボランティア活動に参加することを通して，障害者とかかわる機会をもつ。
	ボランティア活動に参加してみたい。
障害（者）についての知識の習得	適切な支援をするために，障害（者）について基礎的な知識を身につける。
	まずは，もっと基本的な知識を身に付けること。
障害（者）についての意識改善	これまでの障害（者）に対する自分の考えを改める。
	障がいのある人に対して，自分が心理的障壁を築かない。
個性の尊重	障害のある人障害も含めて個性ととらえたうえで，個人を理解する。
	障がいのある人と関わる機会があったら，勝手に障がいを決めつけず，その人のことをちゃんと理解するように努めること。
教師としてできることの探求と実践	将来，教師の立場から何ができるのかを考える。
	教師になったときに，障がいのある方にも理解がある接し方や授業をする。
できることは何かの探求	自分になにができるのかをこれから考えてる。
	具体的には思い浮かばないが，何かできればいいなと思っている。

（2）概念のカテゴリー化

Table 6に示す通り，Table 5の概念をもとに，定義

や意味を解釈し，共通する概念を〈障害者への姿勢〉〈かかわり方の工夫〉〈障害者への直接的なかかわり〉〈障害（者）についての認識〉〈個性の尊重〉〈教師としてできることの探求と実践〉〈できることは何かの探求〉の７カテゴリーを生成した。最終的には【障害者とのかかわり方】【障害（者）についての認識】【持続的探求】の３カテゴリーグループにまとめた。

Table 6　生成されたカテゴリーグループ，カテゴリー，概念

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念
障害者とのかかわり方	障害者への姿勢	よりそう姿勢
		困っている際の支援
	かかわり方の工夫	かかわり方の工夫
	障害者への直接的なかかわり	積極的なかかわり
		ボランティアへの参加
障害（者）についての認識	障害（者）についての認識	障害（者）についての知識の習得
		障害（者）についての意識改善
	個性の尊重	個性の尊重
持続的探求	教師としてできることの探求と実践	教師としてできることの探求と実践
	できることは何かの探求	できることは何かの探求

Ⅳ．考　察

本稿では，教育学部に在籍する学部１年次生を対象に，障害のある子どもの保護者による当事者参加型授業を実施し，授業後のアンケートを分析した。その結果をもとに考察する。

１．受講後の理解について

受講後の理解を問う12の項目のうち，項目２「障がいのある人も積極的に社会参加をしたほうがよい」，項目７「障がいのある人もいろいろな作業をすることができる」，項目８「仕事の中には，障がいのある人が入ってできる内容がたくさんある」，項目10「障がいのある人も，十分に指導すれば効果が上がる」は，いずれも平均評定値4.5を超えた。本稿の当事者参加型授業の講演部分において，保護者らは障害のある子どもと家庭でどのようにかかわっているか，学校生活や社会生活を送るうえで困ったことは何か，どのようにしたら改善できるかを語った。障害のある子どもが，数十年前は，家族と離れて暮らすことが大半であったなどの社会的背景の変遷や，障害があっても仕事を持ち，働くことで社会参加していることなど，自らの体験をもとに講演した。さらに，障害があるからといって，常にサポートが必要ではないこと，過度なサポートは，障害のある人が成長する機会を奪うこともあることについて話し，あくまでも，見守りながら，必要な時に手を貸してほしいと訴えた。このような語りから，障害のある人の就労状況や，社会参加の実状を知ることができたと考えられる。

一方で，項目６「障がいのある人がクラスにいることは，周囲にもよい影響がある」の平均評定値は3.78と最も低かった。これは，保護者の語る内容が，あくまでも障害のある子どもとその保護者から目線のものに重点が置かれていたことによると考えられる。

２．今あるいはこれから自分にできると思う取り組みについて

分析より，本稿における当事者参加型授業によって，受講した学生らの回答は【障害者とのかかわり方】【障害（者）についての認識】【持続的探求】の３カテゴリーグループに分類された。

【障害者とのかかわり方】に関しては，具体的なかかわり方を知ったことにより，今後，自ら機会をつくり，積極的にかかわっていきたいと考える者，困っている際はかかわっていきたいと考える者，見守る姿勢でかかわっていきたいと考える者に分かれたのが特徴的である。本稿における当事者参加型授業は，「知的障害児（者）の感じているコミュニケーション上の課題を知り，理解を深める」ことを目指すものであった。学生らは，障害児（者）の感じているコミュニケーション上の課題を知るとともに，自身のコミュニケーションについてふり返り，そのうえで自分にできると思うかかわりはどのようなものかを考えていることが推察される。

【障害（者）についての認識】に関しては，障害（者）についてこれまでの意識を改め，さらに知識を習得したいという学びへの意欲がみられた。

【持続的探求】が内包している〈教師としてできることの探求と実践〉では，教育学部１年次生が，将来の職業を意識したうえで自分にできることを考えていきたいという探求への意欲がみられた。大学生活の早い時期に，教育に携わる将来の自分を想定し，障害（者）を捉えたり，障害のある子どもとその保護者とのかかわりについて考えたりする貴重な機会となったのではないだろうか。

３．今後の課題と展望

本稿において，理解の深まりを問う12の項目については，授業前のアンケートを実施していなかった。そのため，授業前後の変容を比較することができず，理解の深まりや授業の効果については推測の域を脱せない。また，記述データをもとにしたカテゴリー生成に関して，複数名での作業や検討を十分に行うことができなかった。したがって，稿者の解釈によるところが大きい。今後は，事前アンケートを実施し，複数名による分析を重ねたうえで，当事者参加型授業の効果について厳密に検証することが必要である。加えて授業終了後のアンケート結果のみから，理解の深まりを推察することは限界がある。追跡調査の導入や方法の検討も必要である。

徳田（2005）は障害理解について，「障害のある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想，特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり，障害に関する科学的認識の集大成である」と述べる。さらに，障害理解の発達段階を，第１段階「気づきの段階」，第２段階「知識化の段階」，第３段階「情緒的理解の段階」，第４段階「態度形成段階」，第５段階「受容的行動段階」としている。これら５つの段階を用いて，学生への質問紙調査結果を分析したものに田口・林・橋本・池田・大伴・管野・小林・三浦・戸村・村松（2012）がある。本稿で得た結果についても，５つの段階と照合することで，学生の障害理解の現段階を把握し，段階移行を促すような障害理解教育カリキュラムの構想につなげることができると考える。

また，本稿で対象とした教育学部１年次生による障害理解の学習は，将来，学生が教職に就いた際の授業実践に関わるものでもある（庄司，2013）。このことと，本稿の調査において「障がいのある人がクラスにいることは，周囲にもよい影響がある」の評定値が他の項目の評定値より低かったこととあわせて，教員養成課程における障害理解教育カリキュラムの意義を再検討し，１年次から４年次までの連続した学習を展開する必要がある。

註

本稿において，大学 COC 事業「障がい者支援領域」の名称にかかわり，アンケートでは「障がい」の語を用いた。自由記述の回答例で引用した「障がい」「障害」の語は，調査対象者の記述をそのまま用いた。なお，文献，論文等における「障がい」「障害」の語は原文を用いた。

文　献

五十嵐一徳・村上理絵・小野塚剛・西村浩二・竹林地毅・谷本忠明・若松昭彦（2015）インクルーシブ教育時代における大学教育－教育学部生を対象とした当事者参加型授業の効果－．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援実践センター研究紀要，13，65-75.

菊池哲平（2011）教育学部学生における発達障害のイメージ：接触経験・知識との関連．熊本大学教育実践研究，28，57-63.

真城知己（2002）教員養成課程における「障害理解教育」実践者養成に関する研究：意識変化の特徴検討へのコンジョイント分析の応用．発達障害研究，23（4），267-275.

柴田貴美子（2010）病や障害を抱えた当事者が語る「当事者参加型授業」の現状と教育効果に関する文献レビュー．文京学院大学保健医療技術学部紀要，3，23-31.

庄司和史（2013）大学生の障害理解学習について－「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より－．信州大学人文社会科学研究，7，159-173.

田口禎子・林安紀子・橋本創一・池田一成・大伴潔・菅野敦・小林巌・三浦巧也・戸村翔子・村松綾子（2012）通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討：教師志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査．東京学芸大学紀要，63（2），303-319.

徳田克己（2005）障害理解と心のバリアフリー．徳田克己・水野智美編著．障害理解－心のバリアフリーの理論と実践．誠信書房，2-10.

村上理絵・福本紘未・氏間和仁・林田真志・谷本忠明・船橋篤彦・若松昭彦・五十嵐一徳（2016）教育学部における障害シミュレーションを中心とした授業の有効性の検討．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，14，87-95.

（2017．2．3受理）

Things to Change College Students' Consciousness by Stories from Family Members of People with Intellectual Disabilities: From the Questionnaire Analysis in Classes Targeting Students at Faculty of Education

Aoi HONDO
Graduate School of Education, Hiroshima University
Maki KAWAGUCHI
Graduate School of Education, Hiroshima University
Akihiko WAKAMATSU
Graduate School of Education, Hiroshima University
Masashi HAYASHIDA
Graduate School of Education, Hiroshima University
Tatsumi MUTAGUCHI
Graduate School of Education, Hiroshima University
Norimune KAWAI
Graduate School of Education, Hiroshima University
Takeshi CHIKURINJI
Graduate School of Education, Hiroshima University

In this study, a lecture with active participation of parents of children with disabilities was held in a lecture-type educational seminar for the freshmen of the department of education and its effectiveness was examined. The results of the analysis of the questionnaire designed to measure the degree of understanding of disabilities and people with disabilities revealed that students had acquired a new perspective for understanding disabilities and people with disabilities by listening to the parents' thoughts and feelings. The students who attended the class were asked about what they thought they could do at present or in the future, and the results were qualitatively analyzed. "How to interact with people with disabilities," "recognition of disabilities and people with disabilities," and "sustainable exploration" were extracted from the results. It was speculated that the class with active participation of parents with children with disabilities helped the students planning to be engaged in education in the future to clarify what they should do in the future in relation to education as well as understand disabilities and people with disabilities.

Keywords: inclusive education, university education, educational seminar, active participation of persons involved, understanding of disability